

## 待降節第3主日礼拝説教「はじまりの予感」

日本基督教団石神井教会 2018年12月16日

### 【旧約聖書日課】ゼファニヤ書 3章14～18節

14 娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。

娘エルサレムよ、心の底から喜び躍れ。

15 主はお前に対する裁きを退け、お前の敵を追い払われた。

イスラエルの王なる主はお前の中におられる。

お前はもはや、災いを恐れることはない。

16 その日、人々はエルサレムに向かって言う。

「シオンよ、恐れるな、力なく手を垂れるな。

17 お前の主なる神はお前のただ中におられ、勇士であって勝利を与えられる。

主はお前のゆえに喜び楽しみ、愛によってお前を新たにし

お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。」

18 わたしは、祭りを祝えず苦しめられていた者を集める。

彼らはお前から遠く離れ、お前の重い恥となっていた。

### 【福音書日課】ルカによる福音書 1章5～25節

<sup>5</sup>ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。<sup>6</sup>二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。<sup>7</sup>しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。<sup>8</sup>さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、<sup>9</sup>祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。<sup>10</sup>香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。<sup>11</sup>すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。<sup>12</sup>ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。<sup>13</sup>天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。<sup>14</sup>その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。<sup>15</sup>彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、<sup>16</sup>イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。<sup>17</sup>彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

<sup>18</sup>そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」<sup>19</sup>天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。<sup>20</sup>あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

<sup>21</sup>民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手聞取るのを、不思議に思っていた。<sup>22</sup>ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。<sup>23</sup>やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。<sup>24</sup>その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。<sup>25</sup>「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

## アドヴェントの《喜び》

暦の上ではアドヴェントのただ中ですが、わたしたちの教会では、今日は9時からのCS礼拝をお休みにして、午後、こどもたちのためのクリスマスの祝いをいたします。聖書朗読とキャロルの讃美で進められる降誕劇を組み入れた「ページェント礼拝」と、お楽しみの「祝会」を準備しています。子どもたちだけでなく、大人の皆さんにもぜひ一緒に祝っていただきたいと思っています。

もちろん、皆さんの中には、「今はアドヴェントの祈りの期節だから、クリスマスの祝いをするのは少し気が早すぎる」と思われる方もあるでしょう。もう少し静かにアドヴェントの祈りに徹したいとお考えの方もあっていいと思います。わたしも、正直に言えば、そのように考えているところがあります。教会のクリスマスの祝いはすべて、24日以降に行いたいとさえ思っています。教会が受け継いできた暦は、無意味に保たれてきたわけではありませんから、大切にしたいのです。

そうだとすると、アドヴェントには禁欲的な祈りに徹しなければいけない、ということでもないでしょう。アドヴェントの期節のカラー（典礼色）は「紫」ですが、近年は、これを受難節の「紫」と区別して「青」を用いる教会もあるようです。受難節のような禁欲的な祈りではなく、むしろ希望と喜びを秘めた祈りの期節だということを表そうとしているのです。しかし、そのような、「紫」を「青」に変更するという試みがされるよりも以前から、アドヴェントの第3主日を「喜びの主日」と呼び、この日だけは「紫」ではなく「バラ色」のカラーを用いるという習慣が、長く保たれてきました。アドヴェントのロウソクも、三本目に「バラ色」を用いて、その習慣が反映されています。

その「喜びの主日」の習慣に従って、今日の聖書日課は選ばれています。「娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び踊れ」と、旧約日課の預言者ゼファニヤは告げています。朗読を省略しましたが、今日の使徒書日課（テサロニケの信徒への手紙一 5章）は、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」と続く箇所が定められています。今日、「喜びなさい」と御言葉によって呼びかけられているのであれば、その喜びの表現として、少しばかりフライング気味でも、こどもたちとまずクリスマスの祝いを始めることも、決して悪くはないでしょう。

もちろん、「喜びなさい」と言われて、いつでも喜べるわけではありません。わたしたちは、ここしばらくの間、続けて教会の交わりの中で幾人もの訃報に接してきました。幾人かは、教会の営みとして葬儀も執り行ってきました。愛する家族を送られた方の心の内を察しないではられません。それでも「喜びなさい」との呼びかけを聞くのは、わたしたちが義務的に喜ぶべきだ、ということではないでしょう。本当は、わたしたちが喜ぶより先に、神がお喜びであることを心に留めよ、ということなのです。「主はお前のゆえに喜び楽しみ…お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる」。神は、「お前のただ中」においてになられて、それゆえにお喜びでいらっしゃるというのです。

## 《香》をたいて

アドヴェントの後のクリスマスに、わたしたちは、神の御子としておいでくださった幼子イエスのご降誕を祝います。神が人の姿となっておいでくださったことを、喜び祝います。アドヴェントは、その神がおいでくださるということを期待し、お迎えする備えのときとして定められてきました。

神がおいでくださる、わたしたちのただ中においでくださる。そのことを、わたしたちは、当たり前のように喜ばしいこととして語ります。

そもそも、わたしたちは、日曜日ごとの礼拝に、神とお会いするために来ているわけです。それは、もちろん、神がわたしたちをお招きくださって、導いてくださって、教会へとお集めくださって、そして、共に神の御前に進み出る礼拝にあずかるようにしてくださっているからです。聖像も聖画もないところでも、わたしたちは、聖書の御言葉が読まれ、教会で受け継がれてきた祈りを共にすることを通して、神とお会いする礼拝にあずからせていただいている。そのような実感がないとしても、そのことを拒絶しようという方は、少なくともここに敢えておいでくださっている皆さんの中には、いらっしゃらないはずです。

それは、当たり前のことではないでしょう。実際、多くの人々は、教会のことは知っていても、日曜日の礼拝に敢えて来ようとはなさいません。それどころか、ご案内したりお招きしても、不快感を示され、とても強く拒まれるということも、決して少なくはないのです。もちろん、そのような方々に、わたしたちは、無理強いをしようとは思いませんし、不快に思われるのならばご案内やお招きをすることも控えるべきでしょう。

そうだとすると、わたしたちがここでお会いしようとしている神は、わたしたちだけでなく、教会の外に留まっている多くの人々のことも顧みてくださり、その人たちともお会いしようとしてくださっているはずです。わたしたちのただ中においでくださるというだけでなく、教会の外に留まっている人たちのただ中にも、神はおいでくださろうとしているはずなのです。

福音書日課（ルカ 1 章）は、洗礼者ヨハネの誕生がその父ザカリアに告げられる場面です（意外に思われるかもしれませんが、「喜びの主日」には、洗礼者ヨハネの物語が日課として定められてるのです）。

ヨハネの父ザカリアは、エルサレムの神殿の聖所に仕える祭司です。祭司には多くの役割があったようですが、大切な毎日の勤めが「香をたくこと」でした。律法（出エジプト記 30 章）では、朝夕に香をたき、絶やさないことが、祭司に命じられています。それは、特別なことではなく、祭司にとっては日常のルーチンワークに過ぎなかったかもしれません。ところが、その日、ザカリアは、その勤めの最中、不思議な体験をしました。天使を見たのです。ザカリアは、**それを見て不安になり、恐怖の念に襲われました。**

本当は、ザカリアは、祭司としてわきまえているはずでした。律法に、祭壇で香がたかれるとき「わたしはそこであなたに会う」（出 30:6、同 36 節）と神が告げられていると書かれていることを。

## 多くを語らなくても

先週この礼拝堂で葬儀を執り行った T 兄は、元々ハリストス正教会の信徒として生まれ育った方で、ご家族の中に今でも正教会の信徒がいらっしゃいましたから、その正教会の習慣に倣って、葬儀の最中、香をたくということを行いました。香をたくことは、教会の営みの中で広く受け継がれてきたことですが、その起源はユダヤ教の祭儀の中にあります。ザカリアが神殿でたいた香と、教会が礼典としてたく香には、同じ意味があるのです。その香がたかれるとき、神がお会いくださっていることを思い起こすのです。

キリスト教会の習慣を知らない方が教会にいらっしゃったときに、「どこに向かって拝めばよいですか」と尋ねられることがあります。それは、「神はどこにいらっしゃるのか」という問いでもあるでしょうし、「神ときちんと相對するにはどうすればよいのか」という問いでもあるでしょう。皆さんならば、どのようにお答えになるでしょうか。中には、「聖書」を示して、「神はこの中、聖書の御言葉の中にいらっしゃる」と答えられる方もあるかもしれません。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハネ 1:1)というのですから、それも一つの答えかもしれません。「この聖書の御言葉の中に神がいらっしゃるから、聖書を読んで神とお会いしましょう」と言ってもよいですし、皆さんにそのように実践してもらいたいとも思います。

けれども、実のところ、聖書を書物としていくら読み進めても、皆が神とお会いするようになるとは限りません。わたしたち自身が聖書を通して神とお会いする経験をしたからと言って、そのことに基づいて聖書を説き教えても、だれもが同じ経験をするようになるわけではないのです。もちろん、わたしたちの説き教える言葉がまったく十分ではないということもあるでしょう。そうだとしても、牧師がもっと優れた言葉で聖書を説けば、皆が神とお会いする経験をするようになる、というわけでもないのです。

聖所で香をたいている最中に天使の現れるのを見て、神の前に立たされたザカリアは、天使を通して神の言葉を聞いたのです。ところが、彼は、聖所から出て来たとき、言葉を発することができなくなっていました。ザカリアは、外で待っていた人々に何も語ることはできませんでした。けれども、**人々は彼が聖所で幻見たのだと悟ったのです**。その人々は、香をたく勤めが、神とお会いする場であることを、知っていたのではないのでしょうか。いいえ、言葉を失ったザカリアを見て、しかしその身に帯びた香の香りを嗅いで、思い出したのではないのでしょうか。「神は、人のただ中においでくださって、お会いくださる」と。

ザカリアが身に帯びた香りは、神とお会いする経験をした者の香りです。わたしたちも、そのような香りを帯びさせていただいているのではないのでしょうか。ここで、神は、キリストの香りを振りまくようにさせられ、その香りをわたしたちの身に帯びさせようとしてくださっているのではないのでしょうか。

ここから始まるのです。喜びの出来事の始まりです。イエス・キリストの福音は、この香りから始まって、世の人々のもとに届けられるでしょう。